

松 山 大 学 論 集
第24卷第4 - 2号抜刷
2012年10月発行

来島村上氏と文禄・慶長の役

山 内 讓

来島村上氏と文禄・慶長の役

山 内 讓

はじめに

来島村上氏は、室町期に史料上に初めて姿を表して以来、各時代の状況に応じて様々な海上活動を展開してきた。例えば、室町期には、荘園の請負や唐船警固に従事し、戦国期には伊予の大名河野氏の重臣として領国支配の一翼を担った。そのような来島村上氏にとって大きな転機になったのは、天正10年(1582)、信長の毛利攻めの最中に主家河野氏やそれと結ぶ毛利氏から離反して羽柴秀吉軍に身を投じたことである。これによって来島村上氏は、秀吉の四国平定後には豊臣大名として取り立てられることになった。

豊臣政権下においては、それまでに蓄積してきた水運力、水軍力が秀吉の統一戦争に動員され、朝鮮侵略が始まると、船手衆の一員としてそれに加わるようになった。こうして始まった朝鮮での活動は、来島村上氏にとって二つの点で従来のものとは大きく異なるものであった。一つは豊臣政権という、これまで付き合ってきた毛利氏や河野氏とは異なる、圧倒的に大きな強制力、統制力を持った政権のもとでの活動であるということ、もうひとつは朝鮮半島沿岸という、これまで自分の庭のようにしてきた瀬戸内海とは大きく異なる地理的条件のもとでの活動であるということである。

このようなまったく新しい条件のもとでの来島村上氏の活動については、慶長の役における通総の戦死など一部のできごとを除いて必ずしも十分に明らかにされているとはいえない。そこで、豊臣政権下における来島村上氏について考える前提として、文禄・慶長の役の全期間を通して、同氏にかかわる事実関



図 関係地図

係を確認することが本稿の課題である。

I 文禄の役と来島兄弟

1 朝鮮渡海

天正20年(1592)3月13日付で発令された朝鮮出兵の陣立書では、「来島兄弟」が、福島正則・戸田勝隆・長宗我部元親・蜂須賀家政・生駒親正とともに五番隊に組み込まれ、700人の軍役人数を割り当てられている²⁾。「来島兄弟」というのは、来島村上氏の当主村上通総とその庶兄で得居家を継いだ得居通幸のことである(来島村上氏はこの時期「来島」と呼ばれることが多いが、正しくは村上姓なので、史料引用の場合を除き基本的には村上通総と表記することとする)。五番隊に編成された諸将はいずれも四国内に所領を有する者たちで

あり、来島兄弟が四国衆の一員として把握されていたことがわかる。この陣立書では総人数 15 万 8,700 人が一番～九番に編成されていた。

4 月 12 日に先陣の小西行長が釜山に上陸したのを皮切りに、後続部隊が相次いで渡海することになるが、そのための兵員輸送体制の構築が急がれることになる。海上活動に経験のある者たちを中心に船奉行が任命され、名護屋-壹岐間、壹岐-対馬間、対馬-朝鮮間の輸送体制が整えられたが³⁾、来島兄弟は、四国衆や羽柴秀保、九鬼嘉隆、脇坂安治、加藤嘉明とともに、壹岐-対馬間の輸送のための船舶の準備を命じられている⁴⁾。

一方、4 月 25 日に名護屋に着いた秀吉は、4 月 28 日付で来島兄弟をはじめ多くの武将にあてて朱印状を発し、自らの朝鮮渡海的意思を示すとともに、そのための船舶の調達を命じている⁵⁾。この秀吉の指示を通総らがどこで受け取ったかははっきりしないが、おそらくすでに朝鮮への渡海を終えていたものと思われる。そして結果的に秀吉の渡海は実現しなかったから、そのまま朝鮮での滞在を続けたのではないだろうか。

因みに、のちに来島兄弟と行動をともにすることになる脇坂安治の動きを見てみると⁶⁾、4 月 12 日に名護屋から出船して同月末に釜山に着き、5 月 13 日に「都」(漢城)に達している。また、6 月 1 日付加藤清正書状には、「九州・四国・中国衆、都に至り相集まり、談合と号して長々逗留し」と記されている⁷⁾。これらからみて、通総らも他の諸将といっしょに釜山に上陸したあと「都」に滞在していたものと思われる。

この頃、先に上陸した陸上部隊は、朝鮮の奥深くに進撃を続けていたが、南部沿岸部では、体制を立て直した李舜臣らの朝鮮水軍が活発に活動していた。李舜臣らの活動については、すでに北島万次氏の詳細な研究があるので⁸⁾、それに依拠しながら整理しておく、ほぼ以下のような状況であった。

先ず 5 月 7 日に巨済島東岸の玉浦で両軍が衝突した。李舜臣の率いる朝鮮水軍が藤堂高虎らの軍に攻めかかり、敗れた日本軍は船に積んでいた武器などを海中に投げ捨てて陸に上がり逃走したという。

また、李舜臣の報告によると、5月29日には晋州湾の泗川で、6月2日には巨濟島西方の唐浦で、それぞれ日本軍を破ったという。これらの戦いで李舜臣は初めて亀甲船を使った。この両海戦は日本側の史料には見えないが、李舜臣の報告書には、唐浦の海戦のあと部下のひとりが日本船の指揮船から金団扇一柄を探し出したが、それには「亀井流求守殿 六月八日 羽柴筑前守秀吉」と書かれていたという⁹⁾。これは因幡出身の武将亀井茲矩に秀吉が与えたものと考えられている。

これらの沿岸部での緒戦の海戦に来島兄弟がどのようにかかわったのかは明らかでない。朝鮮在陣中の諸将に、朝鮮の都での秀吉の御座所、釜山から都に至る路次の宿泊所の普請を命じる、5月16日付朱印状で、来島兄弟も長宗我部元親と一緒に1か所の普請を分担することになっているのを見ると、¹⁰⁾ まだ海上戦には加わっていない可能性が高い。

一方、名護屋では秀吉が6月3日に新たな軍令を発した。これは朝鮮渡海軍の新たな布陣を定めたもので、全軍を大きく「先手備」と「次之備」に分け、それぞれのなかで組を定めたものである。軍勢の総数は13万人で、秀吉はこれらに対して、明国まで攻め入ることを要求している¹¹⁾。この6月3日令においては来島兄弟は、「次之備」のうちで長宗我部元親、生駒親正とともに組を編成するよう求められている。

このような秀吉の強気とは裏腹に、現地では朝鮮の義兵の決起が相つぎ、日本軍の動きも次第に鈍ってきた。また、南部の沿岸地方では、相変わらず朝鮮水軍の優勢が続いていた。6月5～6日には李舜臣が、唐項浦に逃れていた日本軍の船団を撃破し、7日にも巨濟島の南端栗浦で日本軍を破った¹²⁾。

唐項浦の戦いについては日本側の史料はないが、李舜臣は前記報告書の中で「約二十四、五歳、容貌健偉にして服飾華袞」な一人の倭将が戦死したと記している¹³⁾。この武将を得居通幸であるとする見解が古くからある。また、栗浦の戦いについては、「高麗船戦記」という日本側の記録があり、それには「四国志摩守」なる人物が海戦に敗れて近くの島で自害したと記されている。この

「四国志摩守」が通幸であるという説もある。これらがいずれも誤りであることは、別稿で述べたとおりである⁴⁾

南部沿岸部での相次ぐ敗戦の報に接した豊臣政権は、当時漢城に在陣していた脇坂安治・九鬼嘉隆・加藤嘉明の軍を急遽沿岸部の熊川に向かわせた⁵⁾。この三氏が協力して朝鮮水軍にあたるはずであったが、7月5日に脇坂軍が単独で抜け駆けし、巨済島西部の閑山島で李舜臣らの朝鮮水軍に大敗した。さらに脇坂軍の救援に向かった加藤・九鬼の水軍も9日に安骨浦で朝鮮水軍の攻撃を受け、多くの軍船が炎上した。

2 船手衆への編入

義兵の決起や海上戦での敗退の報をうけて秀吉は、すみやかに明まで侵入すべしとした6月3日令の凍結を余儀なくされる。小早川隆景や福島正則・通総・通幸などの諸将にあてた7月15日付朱印状で、「当年中に唐堺迄押詰むべきの旨、七人を以て仰せ出され候と雖も、先ず高麗の儀悉く相静むべく候、大明国の事は来春御渡海成され、仰せ付けらるべきの条」と述べているのはそのことを示していよう⁶⁾。そして、船手衆への詳細な指示は7月16日付朱印状で示された⁷⁾。そこには覚書のかたちで多くの内容が含まれているが、重要なのは次の諸点であろう。

- 1 藤堂高虎が「からい山」(唐山=巨済島)に出向いて船がかりなどを見定め、岐阜宰相(羽柴秀勝)が城こしらえを行うこと、そして九鬼・脇坂・加藤・紀伊衆・菅達長を敵番船への押さえとして配置すること。
- 2 「大船」を造って敵船に負けないように装備を固めること。それに必要な鉄や諸道具、金銀や米は必要次第提供すること。
- 3 城が完成すれば、九鬼・加藤・菅を一組、脇坂・藤堂・紀伊衆・来島兄弟を一組として配置すること。
- 4 来島兄弟を呼び寄せて警固に加わらせること。

これを見てもわかるように、7月16日令は、巨済島を拠点にして防備を固

め、船手衆を再編成しようとしたものと見るができる。そして、第3、4項に示されているように、来島兄弟もその中で警固の役割を果たすことが命じられたのである。これに対応して同日付で通総と通幸にあてて、「からいさん口番船警固のため之有るべき処、藤堂佐渡守、紀州衆、脇坂一所に在城すべく候」と命じた朱印状が出されている¹⁸⁾ これらを見ると、来島兄弟が船手衆に編入されて海上で活動を始めるのは、これ以後のことと考えられる。

7月16日令の趣旨は、11月10日付の船手の諸将あての朱印状でさらに徹底される。ここでは来春に秀吉自身が渡海する予定であることを告げるとともに、それまでは敵番船が出撃してきても陸地へあがって戦いを避け、城を堅固に守るべきこと、「こもかい」(熊川)口に警固のための船を残しておくほかはしっかりした奉行をつけて日本へ漕ぎ戻すことなどを指示している¹⁹⁾ その間9月には、釜山浦などで朝鮮水軍の攻撃が続いたが、先の方針によって日本水軍が正面から戦わなかったため、朝鮮水軍は大きな戦果をあげられなかった。

一方、陸上では明軍の参戦が本格化し、緒戦での日本軍の目覚ましい戦果にも陰りが見えてきた。年が改まって文禄2年(1593)となり、正月には小西行長が平壤での戦いに敗れて撤退し、同月末の碧蹄館の戦いでは、小早川隆景らの奮戦によって日本軍が勝利したが、2月の幸州山城の戦いでは、城を落とすことができなかった。

海上でも日本軍の苦戦が続いた。2月から3月にかけて釜山から40キロメートルほど西にある熊川の入江に停泊していた日本水軍に李舜臣率いる朝鮮水軍がたびたび攻撃を仕掛けた。そのうち2月22日の戦いについて、李舜臣は「乱中日記」のなかで、次のように述べている²⁰⁾

[史料1]

二十二日丁未、暁雲暗、東風大吹、然討賊事急、發行、到沙火郎待風、風似歇、促行到熊川、両僧将及成義兵、送于济浦、欲将下陸之形、右道諸将船、扱不実送于東辺、亦将下陸之状、倭賊奔遑之際、合戦船直衝、則賊勢

分力弱、幾為殲尽、而鉢浦二船・加里浦二船、不令突入、触掛浅狭、為賊所乘、其為痛憤々、胆如裂々

暗雲が立ちこめ、東風が強く吹くという天候のもと、李舜臣らの朝鮮水軍が熊川に向かったこと、李舜臣が配下の者の一部を上陸させる気配を見せ、日本軍があわてふためきはじめた時攻撃を加えたところ、日本軍はばらばらとなつてほとんど殲滅されたこと、朝鮮軍も2隻の船が浅瀬に乗り上げて日本軍の攻撃をうけたこと、などを知ることができる。

日本側の記録によれば、浅瀬に乗り上げた朝鮮の軍船を攻撃したのは脇坂安治・九鬼嘉隆らの水軍であった。この海戦について最も詳しく記しているのは「脇坂記」で、そこには2月21日のこととして、次のように記されている。

〔史料2〕

二月二十一日ニ番船又湊ノ内へ乗入ヌ、各早舟ニ取乗り、我先ニト番船ニ押懸ケルニ、安治ガ早舟一番ニ押カケ、番船ニ縄ヲツケ乗捕リケル所ニ、九鬼ガ早船ヨリモ、又其船ニ縄ヲツケテ番船ニ取乗、前後ヲ争ヒ、詮議マチマチナリシ時、安治イカリテ鎗ヲ提ゲ、九鬼カ船ノ縄ヲ切ハナスベシト下知シケレハ、安治カ家人三宅勝助ガ郎等松千代ト云ヒシ者、十七歳ニテ有シガ進ミ出、刀ニテ九鬼ガ縄ヲ切ハナシ、終ニ其船ヲ乗取リケル間、九鬼ト脇坂ト既ニ同士軍ニナラントシケレトモ、敵味方ノ船ニ押隔ラレ、ソコニテハ事ナカリケリ

これによると、敵番船に乗り移ろうとしたとき、脇坂の手の者と九鬼の手の者が先を争い、危うく同士討ちをしそうになったことがわかる。

そして、「乱中日記」にも「脇坂記」にも記されていないが、この一連の熊川の海戦にかかわって得居通幸が戦死したのではないかと考えられる。そのことを示しているのが次の史料である。

[史料3]²¹⁾

今度敵番船出ニ付、弟得井半右衛門尉碎手、数ヶ所被疵相果之由、不便ニ思召候、然而軍役等不相替申付之段、尤候、知行不可有別儀候条、跡目相続之儀肝要候、委曲長束大蔵太輔、木下半介、山中橋内可申候也、

三月六日 (秀吉朱印)

村上助兵衛尉とのへ

これは、通幸の死を悼む秀吉の朱印状であるが、そこには、通幸（通総の弟と記されているのは豊臣政権の誤認識であろう）が朝鮮軍の番船と戦って、その負傷がもとになって死去したことが記されている。また、同日付で秀吉の側近長束正家、木下吉隆が藤堂・脇坂・菅・加藤・九鬼の船手衆諸氏にあてて同趣旨の内容を伝えた書状も残されている²²⁾

ただ、この両史料には年代が記されていない。そのため私は、以前別稿においてこの文書の年代を文禄3年と考え、得居通幸の死没年も同年の1月か2月のこととした²³⁾ところが、近年宮尾克彦氏から通幸の戦死は文禄2年ではないかとする説が出された²⁴⁾それをうけて改めて検討し直してみると、文禄2年に上記のような熊川の戦いにかかわって戦死したと考えるほうが前後の事情をよく説明できるように思う。その主な理由は次の二点である。

第一は、三鬼清一郎氏の労作『豊臣秀吉文書目録』から教示を得て²⁵⁾次のような関連文書の存在に気付いたからである（この文書についてはすでに宮尾氏も指摘している）。

[史料4]²⁶⁾

去月廿二日、敵番舟出之処ニ、大船二艘船手之衆乗捕之由、註進之趣具被聞召届候、外聞尤思食候、然者取々相争儀、不可然候、所詮向後者、藤堂佐渡守、九鬼大隅守為兩人、惣而可令異見旨、被仰出候間、可任其候、於違背者可為曲事候、猶於様子者、黒田勘解由、片桐市正被仰含候也

三月六日 秀吉公御朱印
菅平右衛門尉とのへ

この文書は、史料3と日付が同じであること、「敵番船（舟）」が出てきたという同じ表現をしていること、あて先が同じ船手衆の一人菅氏であることなどから考えて、史料3と一連のものとも見ることができる。そして史料4には、海戦において船手衆が「大船」二艘を乗っ取ったこと、「取々相争う」ような状況があったこと、その日付が「去んぬる月廿二日」、即ち2月22日であったことなどが記されている。これは前記熊川海戦において、史料1が、2月22日に朝鮮水軍の二隻が日本水軍の攻撃を受けたと記し、史料2が、脇坂軍と九鬼軍が互いに争いながら敵番船を乗っ取ったと記しているのに一致する。これらのことから、史料4が熊川海戦について述べたことはほぼ間違いのないといえよう。とすると、それに関連する史料3も同じ海戦にかかわるものとみることができる。

通幸の死没年を文禄2年と考えた方がよいもう一つの理由は、後述するような、文禄2年の暮れから翌年の初めにかけての通総ら船手衆の動きである。このころ講和交渉の進展に対応して、通総が他の船手衆とともに一時帰国した可能性があるからである。

このようなことから、通幸の戦死は、宮尾説に従って文禄2年2月の熊川海戦時のことと考えておきたい。なお、3月23日付で、目付役の浅野長政と藤堂・脇坂・加藤・村上・九鬼などの船手衆が連名で覚書を作成し、「敵舟相働き候時、各相談せしめ海陸行の儀仕るべく候事」などと定めているのは、おそらく熊川海戦の際の脇坂と九鬼の功名争いを念頭に置いたものであろう²⁷⁾

秀吉は、陸海上での相次ぐ敗戦の報を踏まえて、新たな兵力として東国勢を増派し、「もくそ城」（晋州城）の攻略を最優先とする新たな軍令を3月10日付で発した²⁸⁾。そこでは、「もくそ城」を取り巻く衆、古都（尚州）に在陣する衆、釜山浦に在陣する衆、船手衆などの布陣が定められたが、来島家は船手衆

のうちで450人の軍役を割り当てられた。この軍令において、これまでもっぱら「来島兄弟」と表記され、700人の軍役を負担してきた来島家が「来島」と表記され、軍役の人数も450人にかわっているのは、通幸の戦死が影響しているものと思われる。

3 講和交渉期の動向

戦局が膠着するなかで文禄2年3月頃には、明使と日本側の小西行長との間で講和交渉が始まる。その動きの中で秀吉は、5月1日付で多くの軍令を出したが、その中の一通において、「もくそ城」(晋州城)の取巻を嚴重にし、一人ももらさず討ち果たすこと、「赤国」(全羅道)への軍事行動を実施すべきこと、中国衆・小早川隆景・四国衆・船手衆は、釜山浦・「こもかひ」(熊川)などで在番の任に着くこと、明より「御佗言」を言ってきたても油断してはならないことなどを指示している²⁹⁾

ここで秀吉は、明使との講和交渉の一方で、晋州城の奪回、全羅道の確保を図ろうとしていることがわかる。そして5月20日には、諸将の具体的な配陣を示したが、そこでは、通総は、九鬼・加藤など他の船手衆とともに「かたく島」(加徳島)に在番すべきことを命じられている³⁰⁾ 加徳島は、釜山と巨済島の間あたりに位置する島である。

なお、秀吉はこれら一連の軍令に先立って、4月12日には通総を含めた船手衆に朱印状を發し、「もくそ城」の包圍を嚴重にすること、釜山・金海・こもかい(熊川)などとの連絡を密にし、兵糧が滞らないようにすることなどを指示し³¹⁾ 5月1日には、長々の在陣の勞をねぎらっている³²⁾

また、6月20日には来島をはじめ朝鮮在陣中の九州・四国衆の「留守居」にあてて、豊後国の百姓が逃散した場合は還住させるようにとの朱印状が發せられている³³⁾ これは、1月に小西行長が、明・朝鮮の連合軍に攻められて平壤から撤退した際、平壤の南方鳳山において小西勢を支援することになっていた大友義統(当時は吉統)が小西勢の到着を待たずに遁走したことを責められて

改易されたことに関連している。改易の混乱に乗じて百姓らが周辺の国々へ逃れ出たのを還住させようとしたものと思われる。

6月29日には秀吉が最後までこだわっていた晋州城が陥落し、一方で明使との和平交渉が進んでいたこともあって、朝鮮での戦いがいったん終息する。それにもなつて朝鮮に渡っていた軍勢の多くは帰還することになったが、九州・中国・四国の大名たちは、朝鮮半島の沿岸部に残って在番の任にあたった。彼らは沿岸部に多くの城塞（いわゆる倭城）を築いてそこに滞在した。

この時期の通総の動向ははっきりしないが、参考のために同じ船手衆の一人脇坂安治の動向を見てみよう。脇坂安治の動きを記した「脇坂記」は、文禄2年の暮れ、秀吉の命によって「水路の衆」（船手衆）は、安骨浦城の在番にあたったが、脇坂・九鬼・加藤の3人でくじを引いて、くじにあたった脇坂は残り、九鬼・加藤は帰国したこと、翌年の3月に九鬼が代わりに安骨浦に来たので、脇坂は帰国したことなどを記している。また、ここには記されていないが、藤堂高虎も、11月には帰国したらしい³⁴⁾ これらを見ると、通総も他の船手衆と安骨浦城に在番しつつ、折を見て一時帰国をしたのではないだろうか。

ただ周辺海域では、李舜臣らの朝鮮水軍が依然として活動しており、日本水軍との間で小競り合いが続いていた。李舜臣の「乱中日記」は、文禄3年3月初旬に唐項浦などで日本水軍を破ったこと、9月末から10月初めにかけても、巨濟島北端の長門浦や永登浦で日本軍を攻撃したことを記している。後者の日本軍は、巨濟島で在番の任にあたった島津義弘や福島正則らの軍であつたらしい³⁵⁾

講和交渉の進展が見られない状況のなかで、文禄4年（1595）になると、国内では関白秀次が名護屋に出陣して再派兵することが考えられ始める。それを示すのが、正月15日付の「高麗動御人数帳」である³⁶⁾ これは、一～五番隊に編成された陸上部隊12万5,000人、船手衆1万250人、朝鮮に残されている守備隊2万6,000人、合計16万人を投入しようという計画である。ここでは通総は850人の軍勢を率いて船手衆に加わることでとされている。ただこの計画

は、明皇帝の使節の来日が現実のものとなり、一方では関白秀次が謀反を疑われて自害に追い込まれる事件が起こったことにより実現せずに終わった。

この年の2月25日に通総は、出雲守の官途と従五位下の位階を与えられた³⁷⁾ 出雲守は、父通康が使ってきた官途である。これまではもっぱら助兵衛尉と呼ばれてきたが、これ以後は出雲守が正式な呼び名となる。

Ⅱ 慶長の役と通総の死

1 再度の渡海

慶長元年（1596）9月、大坂城で秀吉と明使の会見が実現し、両者の思惑の違いが明らかになると、再派兵が現実のものとなる。翌慶長2年2月21日に発表された軍令には、「赤国残らず悉く一篇に成敗申し付け、青国其の外の儀は、成るべくほど相動くべきこと」と述べられていて、赤国（全羅道）を完全制圧すること、青国（忠清道）を可能な限り侵略することが再派兵の目的であったことがわかる³⁸⁾。ここでは通総は（来島出雲守と表記されている）、長宗我部元親・藤堂高虎・加藤嘉明らとともに六番隊に位置づけられているが（軍役の人数は同時に発表された陣立書によると600人）、一方では、「船手の動き入候時は、藤堂佐渡守・加藤左馬助・脇坂中務少輔両三人申し次第、四国衆・菅平右衛門並びに諸警固舟共動くべきこと」と述べられているから、必要な時は船手としての活動が期待されていたものと思われる。

7月10日には通総をはじめ、加藤・藤堂・島津・鍋島・吉川などの諸氏に炎天下の辛労をねぎらう朱印状が一斉に発せられているので、この頃には通総らは再渡海を終えていたものと思われる³⁹⁾。

その船手衆が、7月14～16日の巨済島北部の漆川梁の海戦で大きな戦果をあげた。再派兵を進めようとする日本軍の物資輸送を妨げていた朝鮮水軍を藤堂・加藤・脇坂らの水軍が撃退したのである。この海戦には通総も参加したようで、後述する、9月13日付で南原城での軍忠を賞した朱印状に「最前番舟切捕り、度々の手柄比類なく候」と記されている⁴⁰⁾。なお、この海戦の後、同

じ伊予の船手衆である藤堂高虎（宇和島7万石）と加藤嘉明（松前6万石）が戦功をめぐって争ったことは有名であるが、この両者の対立はその後長く尾を引くことになる。

陸上では、秀吉の指示に従って諸軍が北上を始める。日本軍が当面の目標としたのは、全羅道の制圧であった。軍勢は二手に分かれて進んだ。毛利秀元を主将とする右軍は陸路を北上して全羅道の中心地全州をめざし、宇喜多秀家を主将とする左軍は海上を西進したあと、上陸して南原をめざした。途中で左軍に合流した通総ら船手衆も南原城の攻撃に加わった。

白杵城主大田飛驒守一吉の家臣大河内秀元の著した記録「朝鮮記」⁴¹⁾、薩摩軍の動きについて記した「島津家高麗軍秘録」⁴²⁾や「面高連長坊高麗日記」⁴³⁾の記述を総合すると、通総も加わった左軍の進軍コースは、7月28日に釜山に近い竹島を出発し、見乃梁の瀬戸をぬけて「波頓」^{ハドン}（河東）に達し、「アヤン河」（蟾津江）を川船で遡って南原の南に位置する「ウレン」（求礼）^{クレ}に達するといものであったらしい。

ここで上陸して、さらに南原城をめざして北に向かう軍勢と、港に残って軍船を警固する軍勢に分かれた。本来港に残るはずであった船手衆のうち馬を引き連れているものは南原へ同道することになり、脇坂安治・伊東祐兵・通総の3名がそれに応じ、のちに菅達長も加わった。

周囲を堀に囲まれた方形の南原城の構造を描いた「朝鮮南原城古図」（鹿児島県立図書館蔵）には、城を包囲する日本軍の布陣が書き入れられている。それには来島出雲守の軍勢600人が、加藤嘉明・菅達長・長宗我部元親らとともに北面に配置されているのが見える。8月12日から15日にかけての4日間の激戦の末、南原城は落城したが、「朝鮮記」に記された首注文には、通総が461の首を取ったことが記されている。この首注文は、証拠として切り取った鼻、南原城の絵図とともに日本に送られることになったが、それを託されたのが脇坂・伊東・来島村上の三氏で、彼らはそれを「ウレン」の港にいる奉行のもとへ届けた。

なお、9月13日付で南原城で功績のあった諸将に一斉に朱印状が発せられ、通総にも届けられたが、そこには「赤国内南原城大明人楯籠る処、去んぬる十三日取り巻き、同十五日落居せしむるに付きて其方手前首数四百六十一討ち捕り、即ち鼻到来候」と記されていて⁴⁴⁾、先の「朝鮮記」の記述とほぼ一致する。

2 鳴梁の海戦

南原城陥落後、左軍、右軍は全州に集結して今後の方針について協議した。その結果、加藤清正や黒田長政らの軍勢は、忠清道へ侵攻後慶尚道に戻ること、宇喜多秀家や島津義弘の軍勢は、忠清道侵攻後全羅道の経略にあたること、船手衆は全羅道沿岸を制圧することなどが決められた。その取り決めに従って通総らの船手衆は、全羅道の南岸を海路西へ進んだ。これに対して朝鮮水軍は、一時失脚していた李舜臣が水軍統制使として復活し、反攻の準備を整えていた。そして両軍は、9月16日鳴梁で衝突した。ここは全羅道南岸の半島と珍島にはさまれた狭い海峡である。この鳴梁の海戦で通総が戦死した。戦いの様子を朝鮮、日本双方の史料で見ておきたい。

李舜臣の「乱中日記」は、日本軍は130隻、朝鮮軍はわずかで、朝鮮の諸将のなかには戦いを避けようとする者もいたが、自分は日本軍のなかに突っ込み、火炮や矢を激しく放ったので戦況は一進一退となったこと、やがて仲間の船が駆けつけてきて力をあわせて日本軍を撃退したことなどを記している。

一方、この海戦について記した日本側の記録としては藤堂高虎の事績をまとめた「藤堂家覚書」が詳しい⁴⁵⁾。そこには次のように記されている。

[史料5]

すいゑんと申所に番舟の大將分十三艘居申候、大川の瀬より早きしほの指引御座候所の内に少塩のやはらき候所に十三さうの舟居申候、それを見付、是非共取可申由舟手の衆と御相談に而、則御取懸被成候、大船にてそのせとをこぎくたし候儀は成ましきとて、いつれも関舟を御揃被成、御か

かり候、先手の舟共は敵船にあひ、手負数多出来申候、中にも来島出雲守殿討死にて御座候、其外舟手の被召連候家老之者共も過半手負討死仕候

時期は示されていないが、「すいえん」が近くの「右水営」と考えられること、朝鮮の番船が13艘と少数であったこと、「大川の瀬より早きしほの指引御座候所」という地形的条件が鳴梁のそれと合致していることなどから考えて、鳴梁の海戦の様子を伝えたものと考えて差し支えないであろう。これによると、日本軍は急潮のことを考慮して大船（安宅船か）の代わりに関船をそろえて攻撃を仕掛けたが、先手の船は敵船に遭遇して手負いを多く出し、来島出雲守は討死し、船手衆の家臣も多く討死したり負傷したりしたという。「藤堂家覚書」は続けて、軍目付の毛利民部大輔友重（高政）も海中に落下して危ういところを助けられたこと、敵番船は操船が巧みで、風の様子を見ながら狭い瀬戸を機敏に行動し、日本軍は追撃することもできなかったこと、藤堂高虎も手を二か所負傷したことなどを記している。先の「乱中日記」は、31隻を撃破された日本軍は、そのあと退避して近付いて来ようとはしなかったと記している。

130隻を集めた日本軍の大部隊が、狭い瀬戸の地の利や風向きなどを巧妙に利用して機敏に行動する、李舜臣率いる朝鮮水軍に翻弄される様子を想像することができよう。そのようななかで通総は戦死したのであろう。翌慶長3年に描かれた肖像画の賛によると、36歳だったという。

ところで、その戦いのなかで戦死した日本武将について「乱中日記」は、次のように記している。

[史料6]

降倭俊沙者、乃安骨賊陣投降来者也、在於我船上俯視曰、著画文紅錦衣者、乃安骨陣賊将馬多時也、吾使無上金豆孫要鉤釣上船頭、則俊沙踴躍曰、是馬多時云、故即令寸斬、賊氣大挫

北島氏の訳注に従えば、俊沙という名の降倭が、海中に落ちた「文様つきの紅錦衣を着ている者」を指して安骨浦陣の賊将馬多時であると言った。そこで李舜臣は、部下に命じて船首にその賊将を釣り上げさせた。そうすると俊沙が「これは馬多時である」と確認したので、ただちに寸斬させた、ということである。

徳富蘇峰や有馬成甫が、この「馬多時」が通総のことではないかとして以来、そのように考える研究者が多いが⁴⁶⁾果たしてそうだろうか。鳴梁の海戦で戦死した人物としては通総が最もよく知られていたからこのように考えられたのであろうが、この説では、通総がなぜ「馬多時」（朝鮮語での発音は *Matasi*）と表記されたのかがよく理解できない。これに対して、「懲毖録」の訳注者朴鐘鳴氏は、「両国壬辰実記」の「馬多時」についての撰者割注に「菅野又四郎正陰也、伝語ノ誤リニテ又四郎ヲ又次ト伝ヘタル也」と記されているのをあげて、「馬多時」は、この菅野又四郎正陰のことではないかとしている⁴⁷⁾

「両国壬辰実記」は、寛政8年（1796）に山崎尚長という人物が撰じたもので、凡例によれば、「朝鮮ノ事績ト日本ノ記録セルモノトヲ牽合セ、件々ヲ参考シテ輯録」したという⁴⁸⁾。朝鮮側の事績は主として「懲毖録」に拠っている。「両国壬辰実記」は、その第五巻に「珍島海辺船軍事」という項を立て、鳴梁の海戦の経緯を日朝双方の側から描いている。日本軍に関する部分は菅野又四郎正陰の活動を中心に描き、朝鮮軍に関する部分は李舜臣の活動を中心に描いている。そのうち後者の記述のなかに敵将「馬多時」の名を挙げて前記のような割注を付しているのである。「壬辰両国実記」全体の信憑性は必ずしも高いものではないが、菅野又四郎の部分については何か拠るべき史料をもっていたものと思われる。

その又四郎正陰については、『戦国人名事典 増訂版』が、「鍋島直茂譜考補」^(ママ)を引いて慶長2年9月16日全羅道碧波亭下で戦死、と記している⁴⁹⁾。「直茂公譜考補」巻九の「黄石山南原城攻」の項は、南原城攻めにおける鍋島直茂・勝茂父子の活躍を描き、それを感賞する9月22日付朱印状を載せているが、そ

のあとに「此時全羅道ノ内珍島ニ於テ日本勢李舜臣ト船軍シテ利ヲ失ヒ菅平右衛門ノ子又四郎正陰討死スト也」という記述がある⁵⁰⁾ この「船軍」が鳴梁の海戦を指していることは明らかであるから、この戦いで菅達長の子又四郎正陰が討死したことがわかる（「両国壬辰実記」の「菅野」は「菅」の誤記であろう⁵¹⁾）

そして、菅又四郎正陰の「又四郎」が「馬多時」と表記されたと考えれば（あるいは「両国壬辰実記」が記すように「又四郎」が「又次」と誤伝され「馬多時」となったとも考えられる）、比較的無理がないのではなからうか。もしそうであるとすると、安骨浦の日本陣にいた投降者俊沙が「安骨浦の賊将馬多時」と述べたという点についても、先にふれたように文禄2年の暮れに船手衆は秀吉の命によって安骨浦城での在番にあたっていたから（「脇坂記」）、その頃菅父子が安骨浦にいた可能性は十分にあり、不審はないといえる。

これらの点から判断して、「乱中日記」の記す「馬多時」は、菅達長の子又四郎正陰のことではないかと考えられる。

さて、通総の話にもどると、その戦死の報は、すぐに秀吉のもとに伝えられたようで、10月15日付で、一緒に行動していた船手衆の面々と軍目付毛利友重にあてて、「赤国の内水菅浦」において敵番船と戦って通総が戦死したことを「不便」に思召さる旨の朱印状が出されている⁵²⁾。そして同じ朱印状において子息右衛門一（康親）があとを継いで朝鮮に出陣することを命じている（康親は系図では天正10年の生まれとされているから、このとき16歳であった）。同趣旨は、17日付で増田長盛以下の奉行人連署状でも伝えられ、そこでは、康親の跡目相続を舎弟彦右衛門（吉清）以下家中の者に申し付けたことが追記されている。おそらく通総の弟吉清が後見的立場になって遺児康親に家督を継承させることになったのであろう。

吉清は来島家から離れて長らく黒田長政に仕え、文禄の役では黒田軍の一員として各地を転戦したが、慶長の頃には来島家に復帰していた。南原城攻撃では、来島軍の先手をつとめ、多くの敵の首を取り、鳴梁の海戦のおりには、矢

にあたって負傷をしたが、加藤嘉明に助けられたという⁵³⁾なお、これらとは別に10月17日付で、奉行増田長盛名で「村上留守居」にあてて、康親を跡目とすることが決定したので安心するようにとの書状が出されている⁵⁴⁾

以上は豊臣政権からの正式な意思表示であるが、これらとは別に阿波の蜂須賀家政は加藤嘉明にあてた書状のなかで、彦右衛門に見舞いの使者なりとも送りたいと思うが、「取り乱れ」によってそれが果たせず残念であること、「雲州」(通総)のことを痛ましく思う気持ちはあなたと同じである、などと述べている⁵⁵⁾。これまで行動をともにしてきた船手衆や四国衆にとって通総の戦死が大きな痛恨事であったことがわかる。

3 康親の出陣と帰国

こうして来島家では、康親が跡を継ぎ、叔父吉清の後見をうけながら改めて出陣することになった。一方全羅道に侵入した日本軍は、毛利秀元・黒田長政らを中心とする右軍、宇喜多秀家や島津義弘らを中心とする左軍ともに南部の沿岸地帯に退き、それぞれの分担に従って城塞を普請し、厳しい冬を越す準備をした。

そのようなとき、明・朝鮮の連合軍が、加藤清正が普請をしていた蔚山城を攻撃した。12月末から正月初めにかけて、籠城する加藤清正ら日本軍と攻撃をかける明・朝鮮軍との間で激しい戦いが展開されたが、日本軍は救援に駆けつけてきた諸将の援助を得てかろうじて城を守り抜いた。この蔚山攻防戦において「後巻」として救援に駆けつけてきた諸軍の陣立を示した史料には来島の名は見えないが⁵⁶⁾合戦直後に豊臣政権が関係者に一斉に発給した感状の一通が来島家にも届いている。それには、「今度蔚山表へ大明人罷り出る由注進に付き、各後巻として押出し候と雖も敵引き退く由候」と記されているから⁵⁷⁾残留していた来島勢が村上吉清に率られて救援軍に加わっていたものと思われる。なお、その感状には、蔚山城その他の諸城の普請を丈夫にした後、敵の様子を見て帰朝するようにとの指示も記されている。

一方現地では、蔚山・順天・梁山の3城を放棄して戦線を縮小することが協議され、その内容が宇喜多秀家をはじめとする13名の武将の連名で正月26日付で石田三成など奉行衆に届けられた⁵⁸⁾。その連署状には「来島彦右衛門尉」(吉清)が13名の一人として名を連ねている。しかしこの縮小案は秀吉の怒りを買って実現せず⁵⁹⁾、3月になって新たな在番体制が示された。そこでは四国衆(長宗我部元親・蜂須賀家政・生駒一正・藤堂高虎・池田秀雄・加藤嘉明・来島康親)については特に詳細な指示が出されている。

この7名あての3月18日付の朱印状では、四国衆を四番に分けて、釜山浦の在番にあたる寺沢志摩守(正成)の加勢をすること、四番とは長宗我部・蜂須賀・生駒・伊予衆の各組であること、この四組の者は「鬪取り」をしてくじにあたった者は残り、他の者は帰朝させること、一番くじにあたった者は5月から9月まで在番し、残り三組の者はもう一度くじを引いて、その二番くじにあたったものが10月から翌年の4月まで在番にあたること、もし伊予衆が一番くじにあたった場合はさらにこれを藤堂高虎・来島康親の組と池田秀雄・加藤嘉明の組に分け、この二組間でくじを引いて一組は残り、もう一組は帰朝すること、などの指示が出されている⁶⁰⁾。

この在番体制は寺沢正成あての5月22日付朱印状によって修正を加えられたが⁶¹⁾、結局3月の時点で一番くじにあたらなかった康親たち伊予衆は5月頃には帰朝し、そのあとはそのまま伊予にとどまったと考えられる。前記5月22日の朱印状で秀吉は、「来年大人数遣わされ、働の儀仰せ付けらるべく候」と述べ、慶長4年に再び大軍勢を渡海させるつもりだったようであるが、それは実現しないまま、8月に死去した。秀吉の死後も、順天・泗川などで戦いが継続されたが、11月18日の露梁の海戦を最後に戦闘は終結した。日本軍は、11月から12月にかけて博多へ帰還した。

このち康親は、関ヶ原合戦時に西軍に加担するような行動をとり、合戦後それを責められて伊予の領地を失い、豊後国森へ転封となった。

お わ り に

来島村上氏は、文禄・慶長の役において通幸・通総という二人の当主を相ついで失った。このことは両役での戦いがこれまで経験した瀬戸内海でのそれと大きく異なるものであったことをよく示している。そのような来島村上氏の苦戦をもたらしたのが、朝鮮半島南岸の不慣れな地形、李舜臣をはじめとする朝鮮水軍のすぐれた装備や巧みな戦術であったことは間違いないが、もうひとつの問題として、来島村上氏が属した豊臣政権の船手衆という集団とのかかわりがあったのではないだろうか。

文禄・慶長の役時の船手衆のメンバーは、時期によって若干の出入りがあるが、中心を成していたのは、来島村上氏を含めて藤堂高虎、加藤嘉明、脇坂安治、九鬼嘉隆、菅達長の6氏であった。これらのメンバーは、出自も豊臣政権内での位置も一様ではないが、はっきりしているのは、戦国期以来の海上勢力としての経験を有していたのは来島村上氏と九鬼嘉隆のみであったということである。その点からすると、船手衆集団の中で両氏に寄せられた期待には大きなものがあったと思われるが、それにもかかわらず両氏がこの集団の中で主導的役割を果たした形跡はない。船手衆を引っ張ったのは、加藤・脇坂という秀吉子飼いの武将と、羽柴秀長の家臣から出て秀吉の信頼を得ていた藤堂高虎であった。そして、これら主要メンバーは、集団の中でたえず功名争いとそれに起因する対立を繰り返していた。

このようなことを考えると、文禄・慶長時の来島村上氏の活動に対する理解を深めるためには、同氏を含めた船手衆という集団の性格を知ることが欠かせないように思われる。したがって、豊臣政権における船手衆の編成過程を明らかにし、その集団としての性格を分析することが次の課題となる。

注

- 1) これらの一端については、以下の拙稿で取り上げてきた。「室町期の海賊による荘園請

- 負と唐船警固」（川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会2 西国における生産と流通』清文堂、2011年）、「永禄末期における来島村上氏と河野氏—鳥坂合戦前後—」（『ソーシャル・リサーチ』35号、2010年）、「元亀年間における来島村上氏と河野氏（上）（下）」（『伊予史談』355、356号、2009～2010年）。
- 2) 「毛利家文書」885号（『大日本古文書 毛利家文書』による。以下同）など。以下、豊臣政権が発した各種の軍令や陣立書の理解については、中野等『秀吉の軍令と大陸侵攻』（吉川弘文館、2006年）に負うところが大きい。
 - 3) 中野等「第一次朝鮮侵略戦争における豊臣政権の輸送・補給体制」（『豊臣政権の対外侵略と太閤検地』校倉書房、1996年。初出は1990年）。
 - 4) 天正20年卯月26日豊臣秀吉朱印状「九鬼文書」（『図録 熊野九鬼水軍展』熊野本宮大社、1993年、による）。
 - 5) 「久留島文書」（『今治郷土史 資料編古代・中世』今治市役所、1989年、所収写真版による。以下同）など。
 - 6) 「脇坂記」（『続群書類従』巻593）。
 - 7) 「韓陣文書」巻1（『内閣文庫影印叢刊楓軒文書纂（下）』国立公文書館内閣文庫、1985年）。
 - 8) 北島万次「壬辰倭乱と李舜臣の海戦について—「乱中日記」を中心に—」（『壬辰倭乱と秀吉・島津・李舜臣』校倉書房、2002年）。
 - 9) 「壬辰状草」（状八）（朝鮮史編修会編『朝鮮史料叢刊第六 乱中日記草・壬辰状草』朝鮮総督府、1935年。1978年第一書房復刻、による。以下同）。
 - 10) 「毛利家文書」926号。
 - 11) 「毛利家文書」904号など。
 - 12) 「壬辰状草」（状八）。
 - 13) 「壬辰状草」（状八）。
 - 14) 拙稿「海賊衆得居通幸の死」（『四国中世史研究』4号、1997年）。なお、阿波の蜂須賀氏の家臣森氏が先祖のことを記した「森氏古伝記」（享保4年成立、東京大学史料編纂所謄写本による）に、森志摩守村春が6月2日に「唐島瀬戸」の近くで討死したことが記されているので、「四国志摩守」とはこの森志摩守の可能性が高い。なお、「森氏古伝記」については、中平景介氏の御教示による。
 - 15) （天正20年）6月3日豊臣秀吉朱印状「脇坂文書」（『兵庫県史資料編中世九』による。以下同）。
 - 16) 「小早川家文書」324号（『大日本古文書 小早川家文書』による。以下同）、「松井文書」（東京大学史料編纂所写真版）。
 - 17) 「高山公実録」（上野市古文書刊行会編『高山公実録』上巻、清文堂、1998年、による。以下同）。
 - 18) 「久留島文書」。

- 19) 「脇坂文書」「久留島文書」など。
- 20) 北島万次訳注『乱中日記－壬辰倭乱の記録－』1～3, 平凡社, 2000～2001年。
- 21) 「久留島文書」。
- 22) 「久留島文書」。
- 23) 前掲注14「海賊衆得居通幸の死」。
- 24) 「得居通幸の死没事情について」(史練会発表レジュメ, 2010年)。
- 25) 三鬼清一郎編『豊臣秀古文書目録』(名古屋大学文学部国史学研究室, 1989年)。なお、本書には、史料4以外にも、関連文書を検索する上で大きな恩恵を蒙ったことを記しておきたい。
- 26) 「因幡志所収菅文書」(東京大学史料編纂所謄写本)。
- 27) 「前田家所蔵文書(古蹟文徴第八)」(東京大学史料編纂所影写本)。
- 28) 「浅野家文書」263号(『大日本古文書 浅野家文書』による)。
- 29) 「旧記雑録後編」巻30(『鹿児島県史料旧記雑録後編二』による。以下同)。
- 30) 「島津家文書」955号(『大日本古文書 島津家文書』による。以下同)。
- 31) 「九鬼文書」(東京大学史料編纂所影写本)。
- 32) 「久留島文書」など。
- 33) 「久留島文書」。
- 34) 「高山公実録」。
- 35) 「旧記雑録後編」巻33。
- 36) 「島津家文書」957号。
- 37) 「久留島文書」。
- 38) 「島津家文書」402号など。
- 39) 「久留島文書」など。
- 40) 「久留島文書」。
- 41) 『続群書類従』巻590。なお「朝鮮記」は、「婦島出雲守」という表記をしている。これは、後述の「朝鮮南原城古図」に「来島出雲守」と明記されていることから判断して誤記と思われる。因みに北九州に来島きじまという一族がいて、豊後出身の大河内秀元にとっては、そちらのほうが慣れた読み方だったのであろう。そのため来島が「きじま」と読まれ、その音通で「婦島」と表記されたものと考えられる。
- 42) 『続群書類従』巻591。
- 43) 『改定史籍集覧』第25冊。
- 44) 「久留島文書」。
- 45) 『改定史籍集覧』第15冊。
- 46) 徳富蘇峰『近世日本国民史 豊臣時代己篇(朝鮮役下巻)』民友社, 1922年。有馬成甫『朝鮮役水軍史』海と空社, 1942年。近年では、笠谷和比古・黒田慶一『秀吉の野望と誤算－文禄・慶長の役と関ヶ原合戦－』文英堂, 2000年。北島万次前掲注8「壬申倭乱と李

舜臣の海戦について」など。

- 47) 『懲惑録』平凡社、1979年、256頁。
- 48) 内閣文庫所蔵写本による。
- 49) 高柳光壽・松平年一編『戦国人名事典 増訂版』吉川弘文館、1962年。
- 50) 佐賀県立図書館編・刊『佐賀県近世史料第一編第一巻』1993年。
- 51) 天正18年小田原城并葦山城取巻人数書（「毛利家文書」1559号）にも「管野平右衛門尉殿」と見えるから、「菅」が「管野」とか「菅野」と誤記されることはよくあったらしい。
- 52) 「久留島文書」。
- 53) 「村上吉清働之覚」（内閣文庫所蔵写本）。
- 54) 「久留島文書」。
- 55) （慶長2年）10月25日蜂須賀家政書状「近江水口加藤家文書」（東京大学史料編纂所影写本による）。
- 56) 「黒田家文書」（福岡市博物館編・刊『黒田家文書』第1巻、1999年、による）。
- 57) 「久留島文書」。
- 58) 「島津家文書」1206号。
- 59) この連署の中心人物とみられた蜂須賀家政や黒田長政が所領を没収されかけ、逆に連署を拒否した加藤嘉明が加増等の褒賞を受けたことは、津野倫明氏の一連の研究に詳しい（「朝鮮出兵と西国大名」佐藤信・藤田覚編『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版、2007年、「軍目付垣見一直と長宗我部元親」『長宗我部氏の研究』吉川弘文館、2012年、初出は2010年）。
- 60) 「名古屋市博物館所蔵文書」。津野倫明「慶長の役における長宗我部元親の動向」（前掲『長宗我部氏の研究』、初出は2004年）参照。
- 61) 「鍋島家文書」（『佐賀県史料集成古文書編』第3巻、佐賀県立図書館、1958年）。この朱印状の年代比定については諸説あるが、津野倫明氏の説に従う。（「朝鮮出兵の在番体制に関する一朱印状写—文禄五年説に接して—」『日本歴史』684号、2005年）。

[付記] 本稿執筆に際して、本学教授増野仁氏には、各種資料の提供をいただくなど多くの便宜を図っていただいた。記して謝意を表する次第である。